

「パラリンピックから広がるスポーツの可能性」

前埼玉県立大学健康開発学科教授 佐藤雄二

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大によって、東京オリンピック・パラリンピックの1年延期が発表されました。今年の開催に合わせてコンディションを調整してきた多くのアスリートは、コンディションのみならずモチベーションの維持にも一苦労かと思われます。

そこで、今やオリンピックよりもメディアへの露出度が多いのではと言われるパラリンピックのアスリートたちに着目して、なぜ彼らがそれほどまでにスポーツを愛し、また見る者に感動を与えるのかを改めて考えてみたいと思います。

1. パラリンピックの歴史と変遷¹⁾

さまざまな障がいの中でいち早くスポーツ団体が創設されたのは、1888年にドイツで創設された聴覚障がい者のためのスポーツクラブでした。その後、1924年に国際ろう者スポーツ連盟が設立され、同年にはパリで第1回国際ろう者スポーツ競技大会（現在の「デフリンピック」）が開催されました。これが国際的な障がい者のためのスポーツ大会の始まりです。実は、このデフリンピックの2025年の第25回夏季大会を日本へ招致しようという機運が高まっています。²⁾

しかし、現在のパラリンピックへと発展した契機は何といても、第二次世界大戦末期の1944年、イギリスのロンドン郊外に戦争により負傷し脊髄損傷となる兵士の治療と社会復帰を目的に、ストーク・マンデビル病院内に開設された脊髄損傷科の初代科長にルードウィヒ・グッドマン卿が就いたことです。かれは脊髄損傷者のために車いすに乗ったままポロやバスケットボールや卓球を治療の一環として取り入れ、1948年にはロンドンオリンピックにあわせてストーク・マンデビル病院内で16名の車いす患者によるアーチェリー大会を開催しました。これがパラリンピックの原点とされています。

その後この大会は毎年開催され、1960年オリンピックが開催されたローマで23か国・400名が参加して国際ストーク・マンデビル大会が開催されました。このローマ大会は後年国際パラリンピック委員会(IPC)設立後に第1回パラリンピックと位置づけられました。

そして1964年の東京大会では、車いす使用者だけでなくすべての身体障がい者が参加できる大会として、東京オリンピック直後に2部制で開催されました。第1部はローマ大会に続く国際ストーク・マンデビル大会であり（この大会は後に第2回パラリンピックと位置づけられました）、第2部はすべての身体障がい者と西ドイツの招待選手による国内大会でした。そもそも「パラリンピック」という名称は、「オリンピック開催年にオリンピック開催国で行われる国際ストーク・マンデビル大会」＝「Paraplegia（脊髄損傷者の中の対まひ者：体幹と両下肢にまひがある人）」の「Olympic」＝「Paralympic」という発想から、東京大会の際に日本で名付けられた愛称でした。

その後、車いす使用者に加え視覚障がい者や切断の選手、さらには脳性麻痺の選手や聴覚障がい者なども参加するようになり、1985年国際オリンピック委員会(IOC)はオリンピック年に開催する国際身体障がい者スポーツ大会を「Paralympics（パラリンピクス）」と名乗

ることに同意しました。しかしこの時、従来のパラリンピックという言葉が対まひ者のオリンピックという意味であったことから、身体障がい者全般にわたる国際大会になじまなかったため、ギリシャ語の接頭語であるパラ=Para（沿う、並行）+Olympic（オリンピック）と解釈するようになりました。そして、1989年には国際パラリンピック委員会（IPC）が創設され、現在に至っています。

2. パラスポーツとアダプテッド・スポーツ

前述しましたように、パラリンピックはおもに身体障がいをもった方々の世界大会ですが、他の障がい、すなわち知的障がいや精神障がい（この3つを総称して3障がいといいます）をもった人たちにとっても「スポーツ」のもつ価値は計り知れないものなのです。障がい者スポーツの発足当初はあくまで治療やリハビリテーションの目的であったスポーツが、今では生活の一部であり、生きる糧であり、社会とつながる手段であり文化なのです。

「パラスポーツ」という用語も障がい者スポーツに代わる親しみやすい用語になりつつあります。日本の障がい者スポーツを統括する「日本障がい者スポーツ協会」の英語表記も、Japanese Para-Sports Association、JPSA）です。この「障がい者」という日本語が「Para」という英語に置き換わる意味は大変大きなものです。なぜならば、あくまで障がい者に限定されたスポーツのみを指すのではなく、障がいをもった方々のためにアレンジされた大枠での広い意味でのスポーツを指す言葉だからです。今やパラスポーツはスポーツの一つのジャンルです。誰もが楽しめるスポーツと言っても過言ではないでしょう。この点では、その人その人に適応したスポーツという意味の「アダプテッド・スポーツ」という言葉があります。この言い方は各個人に照らしたスポーツの在り方を表す言葉としては正確ですが、今ひとつ一般の方々には言いにくく、定着しない用語なのかもしれませんね。

3. サッカーでの取り組み³⁾

一方、人から見たスポーツの多様性とは反対に、あるスポーツ種目を誰でも出来るようにアレンジして楽しもう、という考え方があります。それは「サッカー」です。日本サッカー協会の中に所属する「日本障がい者サッカー連盟」が掲げる標語は、『サッカーなら、どんな障がいも超えられる』です。3障がいという区分を超えて電動車いすや松葉杖の人たちなど7つの団体が、それぞれサッカーを楽しもうと創設された連盟です。

是非一度体験してみてください。あなたの価値観を揺さぶること間違いなしです。

文献

- 1) 日本パラリンピック委員会：「パラリンピックとは」 <https://www.jsad.or.jp/paralympic/>
(2020年4月20日閲覧)
- 2) 『読売新聞』2020年4月23日朝刊
- 3) 公益財団法人日本サッカー協会「障がい者サッカーHAND BOOK サッカーをもっとみんなのものへ」2017